



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	C : シンポジウム II 学びの場の再定義 : 学校と仕事が出会うとき 「はたらく・つながる・生きるちからを育てる現代社会」
Author(s)	井沼, 淳一郎
Citation	シンポジウム報告書 : 子ども発達臨床研究センター総合研究企画, 2012, 54-62
Issue Date	2013-03-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52438
Type	conference paper
File Information	RCCCD_Symposium2012_07.pdf



C：シンポジウムII

テーマ 学びの場の再定義

～学校と仕事が出会うとき

はたらく・つながる・生きるちからを 育てる現代社会

講演者：井沼淳一郎

(大阪府立堺東高等学校教諭)

「生きづらい」と「しんどい」 それぞれの言葉のイメージ

大阪から来ました井沼です。1982年、ちょうど今から30年前に教育学部を卒業しました。1977年から1982年まで5年かかりました。サークル活動に没頭していて、卒業が1年遅れたのですが、それが私の教師の原点として非常に役に立っているかなと思っています。

今日のテーマは「『生きづらさ』を超えて」ということですが、この「生きづらさ」という言葉は、2000年代の中頃ぐらいから湯浅誠さんや、雨宮処凛さんがよく使うようになって広まりましたが、やっぱり違和感はあるんですね。それは何かと言いましたら、「生きづらい」というのはどちらかということとその人個人の問題、あるいは個人の責任の問題につながっていきそうな感じがするんです。「あいつ、生きづらいやつだね」と言ったときに。

大阪では、そういう子どもたちや若者のことを、ずっと「しんどい子」と呼んできました。「しんどい」というのは、その子自身が「しんどい」のではなく、その子が「背負わされているもの」が「しんどい」んですよね。ですから、訳も分からずに背負わされているものの一つ一つを、「何で自分はこれを背負っているんだ？」とか「背負わされているんだ？」というのを分かってくることで、自覚して、「俺はこれを背負うぞ」というところにもっていくことができると思うんです。だから、やっぱり私としたり、「生きづらい子」と言うよりも「しんどい子」と言う方がしっくりきます。

「しんどい子」を取り巻く 全日制普通科の現状

X高校は、この3月まで11年間勤めていました。今日のレジュメは、X高での実践記録です。読んでいただけたら、語りの足りない部分を補えるかなと思います。X高校は、S市の全日制普通科で入試偏差値が下位の学校の1つです。2000年代に入って矢継ぎ早に行われた、いわゆる「特色ある学校づくり」に、積極的にのらなかった学校なんですね。だから教育委員会からはあまりお金も回ってこないで、「地域の学力のしんどい子たちを引き受ける」という役割を担っています。

特に2005年に、学区が拡大したことで、今までにない「しんどい子」たちが入ってくるようになりました。「しんどい」というのはどういう感じが一言で言うと「言葉が通じない」と、当時の先生方がよく言っていたものです。「今度の子は言葉が通じへんねん」という感じです。昨日、栗原先生がおっしゃった「異交通」が毎日起きているような、言っている意味を読み解くために、全力を使って向き合う日々が続きました。

280人定員で入学しますが、卒業するのは200人前後です。一番少ないときで180人ですから、100人が3年間でいなくなりました。それを「何とかせな」ということで、学校全体で授業の在り方や生徒指導の体制もつくり直して、ようやく220人から240人が卒業できるまで回復できました。だいたい就職が3割、大学、短大、専門学校を併せて4割、残りの3割がいわゆる「未定」のまま出ていきます。

2008年のリーマンショック以降は、就職希望が増

えました。ところが求人票はぐっと減っていますから、なかなか就職に結び付けるのは大変なんです。生徒が「朝から来ない」、「昼から来ない」、「来たら寝ている」と、教師はぼやくんですけど、本当にそんな感じで、僕は1年生のときに授業を15分間かせるのも精いっぱいでした。15分持たないというか、そこに行き着くまでにまず時間がかかる。あんまりうるさいから怒ったら、教科書を“バン”と目の前でたたきつけられて大げんかになることもありました。

子どもたちが社会に必要なスキルと関係性を育てることに絞って

その子たちが3年生になったときに現代社会を週2時間教えるのですが、いわゆる教科書通りの現代社会なんて何の意味もなさないの、本当にこの子らがとりあえず10年、18歳で卒業して28歳まで、たぶん正規雇用と非正規雇用と失業の間を行ったり来たりしながら、どちらかというと非正規雇用側で生きていくことになると思うんですが、その10年間をしのいで生きていくために必要な知識、スキルに絞って教えようと思って、授業を全面的につくり変えました。それと同時に、彼らが卒業後も困ったときに頼れる人間関係をどう育てるかということ、1年間考えながら授業をしました。資料1に年間の授業計画を載せていますので、ご覧ください。

24ページに行きます。とりあえず授業を始めるに当たり、何を身に付けさせるか、①から⑤まで5つのことを頭に置いて授業を始めました。詳しく話ませんが、そこから暗中模索が始まったとお考えください。子どもたちががやがやしゃべりながら、どんな感じで授業を進めているのかわかるように少し教室の風景をお見せします。「ああ、こんな感じなのか」と見ていただけたらと思います。

これは11月頃の授業です。実は、元日弁連の会長の宇都宮健児弁護士に学校で講演していただいたのですが、宇都宮さんから送られてきた資料に自殺者数の推移を示すグラフがありました。1998年から日本の社会は自殺者が3万人を超えたままです。自殺者が3万人いるって、「どうしてこんな社会なんやろうか」ということをみんなで議論した時の映像です。

特に30代と70代の自殺者が増えているんですね。その原因は何だろうと考えているところです。

〈ビデオ上映〉

ビデオの女の子が言っている「200万円借りたら」というのは、200万円を借りて専門学校へ行きながら、月に2万円ずつ返していったら、何年かかって総額いくらになるか、「サルでもできる複利計算プリント」というのを作って、チームに分けて計算した授業のことを前提にしています。結果として、230数万円返さないといけないう、11年間かかるということが分かって、彼らは驚くんですね。その授業があって、奨学金を借りてやっと就職をしても、サラリーマンの年収が1998年からずっと下がり続けていることを考えると、「返せると思っている、結局返さなくなっていくんじゃないのか」と彼女は言いたかったわけです。

〈ビデオ上映〉

寝ている生徒を起こしていますね。この子はなかなか学校に来なかった子です。その横に見えているのが、宇都宮弁護士です。生徒と一緒にグループに入ってくれました。

〈ビデオ上映により中断〉

会話の中から見えてくる「しんどさ」を生む背景

前の彼女のときには自分で発表させて、この子のときには僕が代わりに説明しています。生徒が「イヤヤ」と言ったら、その「イヤヤ」が「イヤヤけど言ってもいいよ」なのか、「ここで前に立たされたら私はもう絶対貝になるで」と言っているのか見分けながら、「あ、この子はちょっと無理かな」と思ったから代わりに僕がこうやってしゃべっているんです。

彼女は、学校をよく休みます。父子家庭でお父さんが病気がちなこともあって、下の弟や妹の面倒を見なきゃいけない。その彼女が「母子家庭はまだましなんやで。いろいろ手当があるから。でも父子家庭ってもらわれへんねんで。ひどいと思わへん？」と、ぼそぼそと話していて、僕は初めて、「あ、そうやったんや、この子は」というふうに気が付いた

のです。討論をすると言ってもこんな感じです。言葉にならない言葉をつないでいたり、言える子は言うといった感じで授業をやっていきます。

こういう授業を始めようと思ったのは、先ほど「朝来ない、昼からいない、来たら寝てる」彼らの生活背景が、やっぱりすごいからなんですね。もう標準家族なんていうのは幻想。“貧乏だけれどお父さん、お母さんは一生懸命働いて、切り詰めながら家族みんな協力して暮らしています”なんていう世界は、もうなくなっているんじゃないかなと思います。生活費を自分たちで計算させたときに、食費が1万円とか1万5,000円って、まるでテレビの1カ月1万円生活みたいなことを書いてくる子がいたんです。僕は「ふざけているのか」と思ったら、「私、お父さんから毎月1万円をもらって、『これで生きていけ』と言われて生きてるよ」と。

「1日333円って、先生、結構きついね」などと言います。「どないして暮らしているの？」と聞くと「昼は『じゃがりこ』やな〜。そのまま1日終わる日もある。あるいはアイスを1個食べただけ」というような話をする子が、もう1人や2人じゃないんです。

そういう経済的な問題だけでなく24ページの下のように、複雑な家庭環境の中で、家庭がいつらくて生活を崩して退学していく子が大変多いです。退学の理由には「学業不振」や「進路変更」と書かれますが、学業不振になっていく、よくあるケースは家出なんです。友達の家を転々としながら、何とか学校には通おうとするけれども、結局それは続かないというパターンですね。

例えば、僕が2年間担任をしたD男君。1年生のときは何とか大丈夫でしたが、2年生になってぱたっと休み出したんですね。「何で来ないんや？」と聞いたら、「母さんが『行くな』と言うから。『行ったらあかん』と言うから行かれへん」と。で、そのお母さんは本当のお母さんじゃなくて後妻さんなのですが、実はお父さんから事情があって逃げているんです。前妻の子どもだったD男君兄弟と新しくできた弟、妹。「お前ら施設に行くか？」と言われて、いったんは施設に預けられるのですが、「どうしても施設がイヤや」ということで、お母さんに「それなら飯もちゃんと食わせられへんかもしれへん。苦労するけどそれでもええんか」と聞かれて、D男君兄

弟は「それでもいいからお母さんの元に置いてくれ」と言って、一緒に暮らしている。

でも結局は下の弟、妹の面倒を見させられ、そのために「学校を休め」と言われるという。もう親子関係というよりも支配と隷属の関係なんですね。それにずっと従ってきたけど、ついに高校2年生のときに、彼は「くそばばあ」と言って家に帰らなくなるんです。彼が泊めてもらっている友達の家に行って、「どうする？」って話をしたけれど、結局辞めました。

I男君は両親が中国人で、お父さんは日本語がしゃべれません。だからお父さんは仕事をせずにずっと家にこもってる。お母さんは片言の日本語がしゃべれるようになって、パートでたくましく働いている。日本で生きていくために学歴を付けさせたいと思ってI男君を高校へ行かせるけれど、実はI男君自身も小学校、中学校と言葉の問題でいじめられた経験がある。何とか2年生までは行くのですが、ぶつっと糸が切れたように来なくなるんですね。

これら「文化的な排除の圧力」というのはすごくあって、それは単に日本人が中国人に対して排除しているというんじゃなくて、家庭の中でも、日本に溶け込めない父親と、日本で片言の日本語を習得して何とか生きていく母親がいて、「でも、あなたは中国人としてしっかり生きていかなあかん」と言われる。I男君は、日本の漫画を読み、日本人のように怠けたりする一方で、「自分は中国人なのか日本人なのか」分からなくなったのだろーと思います。彼は結局、辞めてしまいました。

H男君というのは、留年して僕のクラスに来ましたが、理由を尋ねると「朝が起きられないです」と言います。本当に起きられないんです。何回電話しても起きない。でも「何で起きられないのかな？」という話ができるようになってきたら、「夜、眠れない」と。「夜眠れないのは、何を考えて眠れないの？」と聞いたら、「自分の将来のこととかを考えると、どんどん眠れなくなる」と言うのです。父子家庭でお父さんは働いてない。病気であるということで、たぶん生活保護を受けながらの生活でしょう。そのお父さんの元で、自分は専門学校にも行けないかもしれないという思いが自分を攻撃する方に入っていく子なんですね。それで朝起きられなくて、来れなかつ

た。

やがて、彼は父親に対する憎しみが言えるようになります。「あんなおやじのために、俺は行きたい学校にも行かれへんねん」と言えるようになって、「じゃあ、専門学校へ行くための金を稼ごうや」と話すと、アルバイトを始めて30万円ためるという目標を持って働きだしました。結局、そのアルバイト先のうどん屋さんでものすごいかわいがられてしまって、出席時間数が足りなくなって辞めました。しかし彼は単位制の学校に通い、アルバイトでためた自分のお金で学費を払いながら、自立に向かって一生懸命やっています。

彼の場合は何とかそこまで持っていったんですけども、はっきり言って、昨日、栗原先生が話された「ほとりに立つ」という点で言えば、僕なんか、「ほとりに茫然と立ち尽くす」というか、もう「途方に暮れて立ち尽くす」ような毎日なんですね。どう手を差し伸べていいのか分からなくて、辞めていく子たちに何もできない。いや、何もできないわけじゃないんですが、何かしても効果が出せないままに終わるということの繰り返しなんです。

高校生アルバイトの現実

もう1つ、彼らの生活背景としては「アルバイトの現実」があります。8割の生徒がアルバイトをしています、見てもらったら分かるように、だいたいの小売業、飲食業、サービス業などの第3次産業です。現在の大阪府の最低賃金は時給800円です。北海道はいくらですか。北海道もかなり安いですね。たいていほとんどの子が最低賃金ぐらいで働いています。主婦のパートと高校生のアルバイトがなければ日本の第3次産業は回っていかないと言えるほど、彼らは基幹労働力だと思うんですね。

そういう中で「使い捨て」にされてしまう。「いつでも取り換え可能な商品」のように、「労働力としての商品」の扱いを受けていますから、いろいろむかつくこととかがあるんですね。M子とT子のアルバイトリポートを載せていますが、いろいろ「もやもや」した気持ちを持ちながらも、雇い主側に感情までコントロールされて、「お客さまのためなら頑張る

んです」ということも言っている。感情までも誘導されるマニュアル労働の中で、「もやもや」しながら「何かおかしい」という問いを持てなくなってしまう。「問いを持つことすら奪われている」のが、アルバイトをしている高校生の現実なんです。

そういう姿にアルバイトリポートを読みながら気付いて、僕は、『あれ？ 何か変！』と言えるようになるだろうと。つまり「問いを立てられる」ようになること。「これでいいんです」じゃなくて、「これ、どこかおかしいと思います」ということを「言い出せる」ような授業をつくらうと思いました。彼らの労働が生み出す価値と文化を正当に評価する、言語化するというのは、同時に労働世界に対して「おかしいことはおかしい」と言って正当に参加してけるようにすること。これが課題じゃないかなと思って、「アルバイトの契約書をもらってくる」という授業を始めたんです。

アルバイトの契約書は出さないといけないんです。労働基準法15条で「労働条件については明示するものとする」という義務があって、これを破った使用者の側は、悪質な場合は罰金を科せられます。つまり重い罰が与えられるはずなんです、アルバイトの契約書というのは、渡されないか渡されても意味が分からずに捨ててしまっている場合がほとんどです。これは、高校生だけではありません。大学で授業した時に聞いたら、「契約書を見たことがない」とか、あっても「捨てました」とか、「もらっていません」という反応ばかり。大学生のアルバイトでも同じなんですね。むしろ大学生のアルバイトの方がひどい使われ方をしているんです。深夜に入れるから、好きなように深夜勤務をさせて、割増も払わずにいても、大学生は、「自分たちはちょっと賢い」と思っていますから、そういう困難な中でも「頑張る自分に酔う」んです。ますます「搾り取られていていること」に疑問を持たないんですね。

ちょっと話がそれました。T子のアルバイトの話をして。もうひどい串カツ屋さんのアルバイトなんですね。2年半続いているけれども、とにかくひどい。夜の11時過ぎでも高校生を働かせて、深夜勤務の手当もないし割増もない。彼女は授業でそれを発表しているときに、「うそつき！」「もう本当にうちの店長はうそつき！」って憤るんですね。この時私

は、「すごい」と思ったんです。何か「もやもや」してむかつくけれど、何が原因か分からないけれど、とにかく、「彼女は憤ることができた」わけですよ。「うそをつかれている」ということも分かってきているんですね。「賢くなったな」というふうに思いました。

弁護士さんがすごくいいことを言ってくれたのですが、「君がこうやって店長を相手に契約書を取ってきたということは、自分にとってもよかったけれども、実は会社にとっても法律を守る方向に一步進むことができた。高校生が社会をいい方向に動かしたんやね」という話をしてくれて、そのときみんな、「あ、そうか。俺ら、社会をええ方に動かしたんだ」とすごく喜んだんですね。これがきっかけで、連鎖反応が始まり、アルバイト先の労働基準法違反が改善していくんです。

この授業を始めて3年目に、最初に違反がどれだけあるか調べたら、最低賃金違反が6件ありました。でもアルバイトの契約書をもらってくるという取り組みを通じて、6件全部解決するんです。ある契約書は、最低賃金以下の時給にわざわざ二重線を引いて最低賃金の時給に書き直して渡している。「先生、これ見て。言わなかったら、このままでいくつもりやったんやで〜。慌てて直している。せめてちゃんと書き直してほしいよね」と生徒が言うんです。

2つ例を挙げます。A子の場合。実は彼女は最低賃金以下ということに気が付いて、スーパーのパートのおばちゃんと協力して、それを売り場主任会議から店長会議に上げてもらって解決していくんですね。私はそのことについて、彼女が書いてきたりレポートの価値や意味が全然分かってなかったんですけど、竹内先生が『教育と福祉の出会い』の中の1章を使って、私の実践を詳細に分析してくれています。

その中で、彼女は事実上の「団体交渉」をやったと書いてくださった。しかもその「団体交渉」を職場のおバちゃんたちと協力してつくり上げていったんですね。仲間うちで文句を言いに行くんじゃなくて、「職場の会議にかけてもらっている」と。これはもう「職場の民主化」ですよ。そういうことは、彼女1人だったらできなかったでしょうし、パートのおばちゃんだけでもできなかったでしょう。彼女

が学校で習ってきて、おばちゃんに言って、おばちゃんが生活の知恵から、「こう持っていった方がいいよ」というアドバイスをしてくれて、要するに高校生とおばちゃんが教え、教えられながら社会を変革していったんです。私は、竹内先生に分析されてこのことの意味が分かりました。

ただ、こういうA子のような例というのは、困難校の中でも「エリートアルバイト高校生」なんだと思います。だいたいアルバイトが1年以上続いている子というのは社会性がある、労働能力があって、臨機応変さがある、職場でもかわいがられていると思うんです。ところが、もっとしんどい生徒がたくさんいるんです。1年持たない。1日、2日行くとクビになってくる。「役に立たん」と言われる。面接に10回行っても10回とも落ちて帰ってくる。さらに言えば、面接によう行かん。いろいろな理由を付けて、大人の前に出て自分についてしゃべることをずっと避けている。意外と成績はよかったりする子らの中にそういう子がいるんです。私はアルバイトが1年以上続いているという子は服装がどうであれ、授業中寝ていたとしても「この子は見どころがある」と思いながら接しています。

K子は、そういうエリートアルバイト高校生じゃなくて、2日行っただけで辞めた子です。授業中もだらっとしていて、ノートもちゃんと書かない子だった。そのK子が机間巡視している私を呼びとめ、「2日で辞めてん」とぼそぼそと言う。「給料もらわれへんの？」って。私は、「やった！この子がそういうことを言った」と思って、「何で2日で辞めたん？」「ちゃんと言うてみたらいけると思うで」って話したんです。「俺の授業は、ちゃんと働いてちゃんともうがモットーだからね。ちゃんと働いたんやから、ちゃんともらいに行き」って。彼女に「いきさつをちょっと書いてみて」ってお願いして、書いてきたのが27ページのレポートなんです。

私は、当初、K子は「『根気がない』とか『やる気がない』とか『役に立たない』と言われて辞めさせられたんやろうな」と思っていたのです。が、実はそうじゃなくて、店側の都合によって彼女は翻弄(ほんろう)されていたのが分かってくるんですね。

それを讀んだ上で、28ページを見てください。彼女は、「何かイヤな感じやったからもう辞めようと

思った。電話するのもイヤやから、そのときはブチりました」。つまり、2日だけ行って、もうあとは行かなくなりました。これがあの子らが辞めるときのいつものパターンなんです。「何かイヤ。でも、何がイヤか分かん。うっとうしいから、ブッチする」。そして行かなくなる。

でも、授業で先生に、「ちゃんと働いたら、ちゃんともらわな」と言われたから、「そういうことをするのは失礼やな」と感じるようになったんですね。ブッチするのは失礼やから「辞めます」とちゃんと伝えて、「働いた分はくれますか」と言ってみようと思えたんですね。

そうしたら、面白いことに、向こうの店長もふてこい態度を取りながらも、「じゃあ、退職届を書いてよ」と言っている。このふてこいけれども、「退職届を書け」と言ったのは、要するに、ふてくされながらも「ちゃんと法的な労働契約関係に基づいて、あなたのことは対応しますよ」って、店長も一歩前進できたんだと思うんですね。

こんなふうに契約書をもらってくることで職場がどんどん変わっていったんです。もちろんもらえない子の方が圧倒的に多いんです。B子のアルバイトしているスーパーはうちの生徒が何代も続けてアルバイトしていて、最低賃金以下で働かされて、パワハラを受けて、という、いわく付きの店長のところなんです。その店長とのやりとりがものすごく生き生きしていて面白かったので、これは37ページに載せているように劇にしようということで、ロールプレイングの台本にしました。

その中で、この店長は本当にこう言ったらいいです。「お前、先生に言うとき、あほちゃうか〜って。どうせ最低賃金とかそんなん教えてんちゃうんけ？いらんこと教えんでえ〜ねんって言うときよ！」と。

このやりとりをロールプレイしたときに、弁護士さんがすごいことを言われました。結局、契約書はもらえなかった。でも、「もらえなくてもどっちが正しいか分かって引き下がるのと何も分からずに引き下がるのだったら、全然違うよね」と。負けながら何をつかむのかということに、私は目を開かれました。

労働法の授業ってどっちかということ「物取り」になることが多いんです。「取れたか、取れなかったか」

になるんですけれども、「そうか、『負けながらつかむ』という方法もあるんだ！」ということを教わりました。

ケーキ屋でアルバイトしているW子は「契約書をもらえますか？」と言ったら、「そんなものない」と言われます。「法律では出さないとあかんのですよ」と言ったら、今度は「そんなこと言うんだったら、そこらへんに違法駐車しているのはみんな法律違反やないか。世の中みんな違法しているのに何で俺だけ守らなあかんのや」みたいなへりくつを言われました。

そういう話を授業中に聞きだして、「それ面白いから、じゃあ、この店長にどうやって契約書を書いてもらうか、みんなで議論しよう」となりました。そうしたら、「キレてみる」とか、「泣いてみる」とか、「雑誌の切り抜きをさりげなく挟んでおく」、「『最低賃金はいくらになりました』というページを開けて見せておく」とか、いろいろなアイデアが出た。

W子に「やってみる？」と聞くと、「やってみる」。その後、「どうやった？」と聞くと、「だめやった」と答えたあとに「でも、いいねん。あのあと、店長にいろいろ語られてな。離婚して、俺がどれだけ苦労したかという話が延々続いて、『世の中、金を大事にせえよ』という話をされて、店長さんも苦労しているからね」と話すんです。彼女は負けながら一歩引いて、そのアルバイトを続けるんですね。

討論の場から生まれる “疑問” にこそ意味がある

こんなふうにやっていると、授業がうまくいく時もあれば、うまくいかない時もある。そもそも計画どおりに進まなくて、思いもかけない方向に展開していく。時々、やっていて何の意味があるのかなと思うこともありましたが、でも昨日の栗原先生の話聞いて、はっとしました。「わいわい、わいわい、議論する、応答する中で小さな公共性が立ち上がってくる」というお話に、「そうか、こういう討論をしながら、『この店長おかしいよね』『じゃあ、この店長にはどうなってほしいと思う？』みたいに、みんなで議論できること自体が、『個別自分の私的なこと』から、『公共的な問題』に開いていけていたんやな」

と思うようになりました。「契約書は取れなかったけど、そういう意味があったのか」と、昨日のお話を聞きながら気が付いた次第です。

7. の「困ったときに頼れる関係をどう育てるか」ということですが、学歴で勝負できない子どもたちにとっては、地元の連れとか同級生というのが唯一の財産です。でも、それは放っておくと「じゃあ、一緒にキャバクラに勤めようか」というふうに落ちていく場合もあります。そうじゃなくて、困ったときには誰かが助けるし、おかしいことには誰かがしるべき場所につないでくれるという関係に変えられないかなと考えたのが7. 以降なんです。

いわゆる「キャリア教育」というのは「個人のスキルをいかに高めるか」ばかりが目されますが、その考えでは絶対に子どもに優劣が出てくるんです。スキルを高めた子と高められなかった子の、競争に「勝った負けた」が出てくるんです。そんなことをしても、結局、今度は生きていくためのスキル競争をさせるだけになってしまいますから、そうじゃなくて、足りなかったら友達に補ってもらいながら、あるいは、友達の足りないところは自分が補いながら、チームを組んで共同で能力を蓄積していかれへんか、そういう授業ができへんかなと考えたんです。

ただ、うちの生徒は本当に人間関係が下手ですから、人間関係のトラブルで学校を辞めてしまう子もいます。そんな子らに「親しくない子たちとグループをつくって議論せよ」なんていうのは、最初はハードルが高いんですね。それができるという確信が持てたのは、29 ページに載せたC子とS子との会話がきっかけでした。

C子は、授業中、全然話を聞いてくれない。弁護士さんが来て、気合を入れて授業しているのに遊んでばかりで全然聞いてくれないものだから、最後に僕がキレかけたとき、S子が、私に「先生、ハローワークって何？」って尋ねてきました。ハローワークの授業をしていたときでしたから、「お前、今まで何を聞いていたんや。俺、ハローワークの説明をしてきたやろう」と言いながら、「ハローワークに行ったら、パソコンが置いてあって、いっぱい求人検索ができる。お前ら、絶対に世話になる所やから」と話したら、C子が「いらんもん、そんなところ行け

へんもん」と言うんです。「いやいや、行った方が得やて」「いいの、携帯で検索したらいいもん」「携帯とパソコンは情報量が違うんや」と言い合っているところに、S子はまた「アルバイトとパートってどう違うの？」と話を振ってきました。

割り込み質問に答えないとぶちギレて授業にならなくなるので、一つ一つ答えていくようにしています。「ハローワークって基本的に高校生のアルバイトは紹介してくれへんよ。パートはあるけどね」という話をしたら、S子が「私、行けたで」って言うんです。S子はハローワークに行ったことがあったんです。社会人のフリーターのふりして、ちゃんとそこで紹介してもらったんです。それだったら、先に「ハローワークって何？」って聞くなよと思うんですけど、彼女はそういうことを言ったあとに、「簡単やで。パソコンの画面にこう指をタッチするだけで行けるねんで」という話をする。そこまで来たときに初めて、「あ、これはもしかしてC子に言いたかったんや」と分かったんですね。「携帯しなくても生きていけるもん」と言う彼女に「そうじゃないで」というのを彼女は言いたかったんやと読み取れたんですね。私はすごく優しい気持ちになって、「そやな、簡単やな。俺らみたいな年寄よりあんたらの方がすぐ覚えられるから」みたいな話ができたんです。

そのときに思いました。「この子らは何言うているか分からへん、とんちんかんなことがいっぱいあっても、でも、『心の奥で友達の何とか力になりたい』という思いがある。それをどうやって引き出して意味付けしてやるかなんや」と。そこからグループ学習というのを怖がらずにやろうと思えるようになりました。

社会の一員の自覚を持ち 世の中と関われるように

30 ページに行きます。労働基本権を語り直すということについてですが、契約書をもらった次は労働三権を教えました。団結権、団体交渉権、団体行動権。これは一番授業では教えにくいことなんです。知識としては教えられるけれども、全然自分の身に付かないんです。でも、授業をつくりなおす中で、私は「団結権というのは、みんなが思っていること

を言い合える権利や。団体交渉権というのは立場の違う人がけんかで殴り合うんじゃないくて、冷静に話し合う権利や。団体行動権というのは俺がどれだけつらいかというのを広くみんなに知ってもらふ権利やで」というふうな話をすることができました。そうして初めて労働三権ということを「身になる言葉」として私は語れるようになったし、授業でも扱えるようになったと思っています。

「高校生、社会を問う」というところについてですが、アルバイトについて店長さんとか社員さんの働き方をみて、過労死の危険度チェックをしようという課題を最後に出しています。それは「アルバイトだからいつ辞めてもいいんだ」ではなく、同じ働く仲間として、店長や社員の人たちと職場や労働条件について語れる高校生になってほしいと思っているからなんです。

「『〇〇〇』といううどん屋は、社員が過労死寸前です」とリポートしてきたS也君の話です。この子はすごく面白くて、最初は「そんなん勉強したって、どうせ役に立てへん」と言っていた子なんですけれども、このうどんチェーン店で生徒が5～6人働いて、「1人が契約書をもらおうとほかの店でも契約書を出してくれる」とか、「1人が包丁でネギを切っている時に指を切って労災が出た」となったら、ほかの店舗でもみんな労災で行けるようになったとか、どんどん状況が変わってくるのを見て、ついに「先生、高校生って労働組合つくってもええんか？」と言い出します。「それはいいけれども、それよりも職場の親睦会をつくって、正社員の人といろいろな話ができるようにしたらどうや」とアドバイスをしたところ、彼は大人と一緒に「うちの経営はどこが問題ですね」みたいな話ができるようになっていくんです。そういうふうに関係が大人と一緒に社会を論じ、少しずつ社会を変えながら、実感として身に付けていくことができたかなと思っています。僕の報告を終わります。(拍手)

(司会) 今のご報告について、ご感想なり、ご質問なりをしていただければと思います。

■質問1 卒業時の生徒たちについて、特に就職に関して、先生の方からご覧になった変化があれば、

ご紹介いただけたらと思います。

(井沼) 目に見えた変化はないです。就職率が上がるか下がるかは景気に左右されますから、かなりやんちゃしたこの子らが実は、どんどん就職が決まっていくんです。それは2008年の前だからです。2008年の年の子らは、一次試験はリーマンショックの前だったので通ったものの、一次試験で落ちた子は、その後、なんぼ受けても受かりません。ちゃんとやっているまじめな学年といわれた子らがそうなんです。だから、就職に直接の作用があったかどうかは分かりません。

「困ったことがあったら、卒業してからでもいいでや」と話しても、なかなかそんなにすぐには来ないですけれども、数年たって、例えば、1カ月ぐらい前にも、「先生、覚えていますか？」なんて電話がかかってきました。大変な子やっただけで覚えているんですが、非正規雇用を繰り返して、最終的には水商売へ行き、キャバクラやって、派手な生活もして、それももう先が見えたから、「そろそろ高校時代に言っていた専門学校に行きたいんですけど、どうしたらいいですか？」と言います。「福祉の方に行きたいんですけど」という相談で、「やっと戻ってくるんやね」と関係の先生につないでいきました。そういうふうに関係が何年かたってからというのは出てきていますね。

(司会) ほかの方、いかがでしょうか。

■質問2 お話の途中で「キャリア教育」は個人のスキルを高めるだけであり、優劣や競争が付きものである」とありましたが、そういったとらえ方以外にキャリア教育についてどう考えているかということをお聞かせ願いたいのですが。

(井沼) いわゆる一般的なキャリア教育の一番あかんところは、個人のスキルや能力を高めて、求める人材に合うようになったかどうか。その1点が変わらない限り、キャリア教育は、結局、子どもたちからそっぽを向かれていくだろうなと思うんです。

というのは、どれだけ頑張ったって計算が苦手な子はいるし、どれだけ頑張ったって漢字がなかなか

読めない子っているんですね。例えば、割増計算するとか、時給計算するという時に、僕は時給計算ボタンとパーセント計算ボタンが付いている電卓を買ってきて、クラス全員に配ってやる。「割増計算を試してみ」と言っただけで、割る数と割られる数がどっちが先だったかなんぼ言っても入っていかない子っているんです。

そういう子には4人でチームを組んで、「不安になったら、隣の子に『これでいい?』って聞きや」って。「もし無理やったら、『もう私は無理やから教えて』と言いや」と教えます。言ったら、「自分の足りないものは誰かの力を借りながら」ということは恥ずかしくも何ともないし、「そういうことも認めてよ」と言える大人にならないとあかんやろうと思っています。そこがいわゆる「キャリア教育」との違いだと思っています。